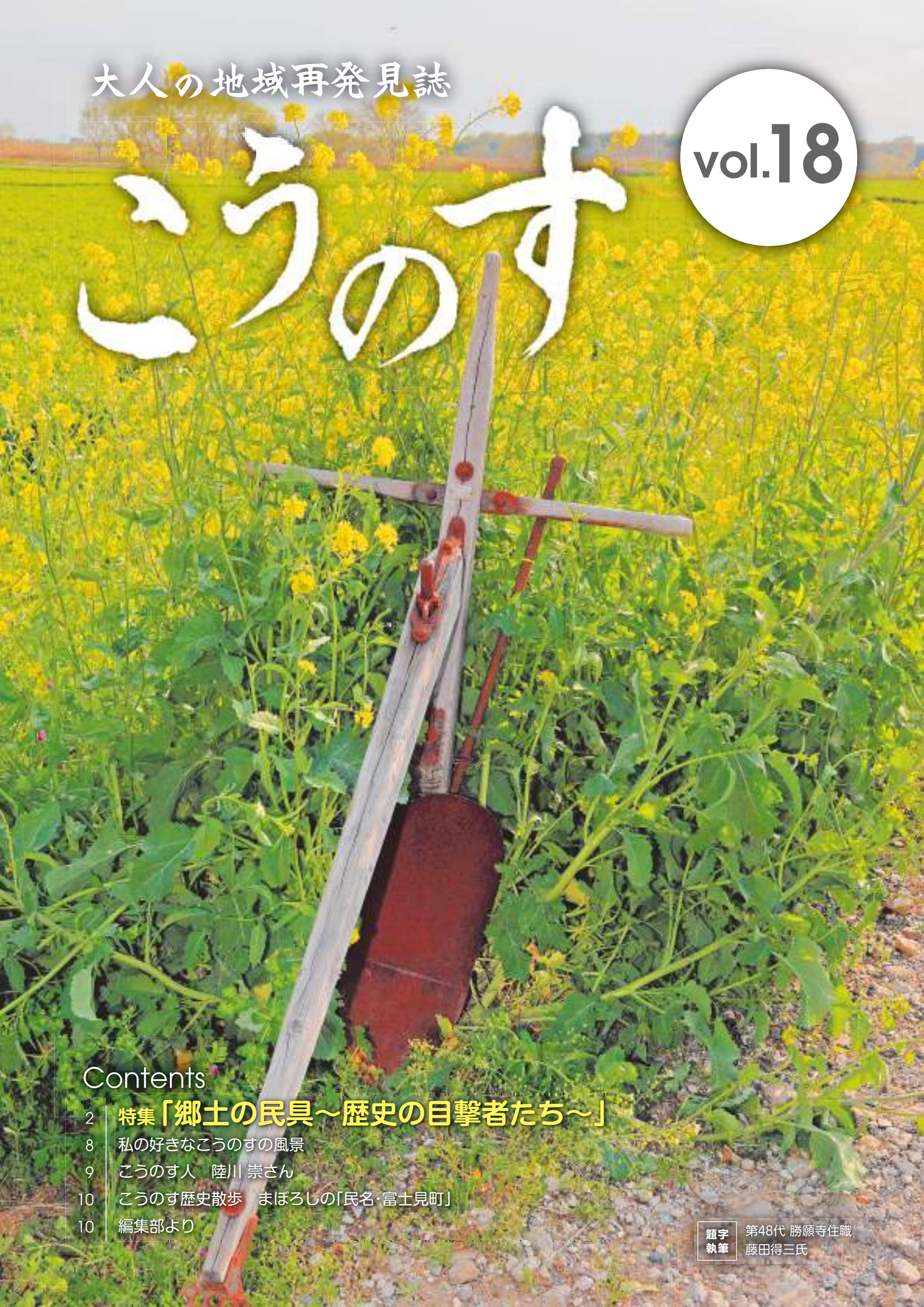
大人の地域再発見誌

こうのす

vol.18



Contents

2 特集「郷土の民具～歴史の目撃者たち～」
8 私の好きなこうのすの風景
9 こうのす人　陸川 崇さん
10 こうのす歴史散歩　まぼろしの「民名・富士見町」
10 編集部より

題字執筆　第48代 勝願寺住職 藤田得三氏

郷土の民具 ～歴史の目撃者たち～

民具とは、「民衆の日常生活における諸要求に基づいて作られ、長く使用されてきた道具や器物の総称」とされる。様々な生産活動や生活に寄り添ってきた道具達は、教科書には載らない民衆の歴史を間近で見てきた目撃者である。残された道具達をみると、地域の事情や使用する人の癖等も考慮されて、より便利な作業や生活ができるように様々なアイデアが組み込まれており、地域の生活史や技術史を知る上でも大事な地域の宝といえる。

今回は、鴻巣市に残る資料を中心に、民具を紹介したい。なお、今回の特集を組むにあたり、鴻巣市教育委員会生涯学習課には所蔵資料の見学・撮影・掲載について、多くの御協力を頂いた。記して感謝したします。

（文；高橋　敦、写真：長島信幸）

（個人蔵）と表記した以外の資料は鴻巣市教育委員会所蔵の資料である

表紙写真

●犂（からすき）　高北式

牛馬に引かせて田畑を耕起する道具。西日本を中心に６～８世紀の出土資料が知られているほか、江戸時代の農耕図等にその姿が描かれている。高北式は三重県名張市の高北農具製作所（現株式会社タカキタ）で作られたもの。

（個人蔵）

背景写真

●唐箕（とうみ）

脱粒した穀物とゴミや籾殻等を分離する道具。円形部分に羽があり、その羽を回転させて起こした風力で重い穀物は近くに、軽いゴミや籾殻等は遠くに飛ばされることで分離する。

Ⅰ．育てる　～農耕具～

●犂（からすき）　深見式

表紙の高北式と同じ犂である。深見式は福岡県福岡市の深見商店（現深見興業株式会社）で作られたもの。

●馬鍬（まぐわ）

犂（からすき）と同じく、牛馬に引かせる農耕具。耕起した田畑の土を細かく砕くのに使用される。日本では古墳時代から出土例が知られている。

●エブリ

土均しに用いる道具。主に水田で田植え前に使用されるが、塩田等でも使用されることがある。鋸歯状の歯を持つが、この部分が平坦な例もある。弥生時代の遺跡からも出土例があり、形が変わらず使われてきた道具の一つである。

●足踏み脱穀機（あしぶみだっこくき）

刈り取って乾燥させた稲穂から籾を脱穀する道具。中央の歯が付いた円形部分を回転させ、籾を歯に引っかけて外す。細王舎は神奈川県川崎市にあった農機具メーカー。脱穀機では国内第一のシェアを持っていた。昭和 43 年に小松グループ傘下に入り、小松部品（株）と名前を変えた。現在はハスクバーナ・ゼノア（株）として農機具の生産を続けている。

●唐竿（からさお）

くるり棒や振り棒（ふりぼう）とも呼ばれる。長い方（柄）を持って、短い方（打部）を回してイネ、ムギ、蕎麦、マメ類等を叩いて脱粒（鞘や籾殻を外すこと）するための道具。打部が割竹を束ねた資料と丸太になる資料とがある。

（右写真は個人蔵）

●万石通し（まんごくどお）

米や麦の選別道具。斜めに設置された金網の上に米や麦を転がし、ゴミや砕米を金網の下に落とすことで分離させる。

Ⅱ．作る・直す　～製作道具～

●座繰（ざぐり）
繭から生糸を挽き出して糸巻きに巻き取る作業（糸繰（いとく）り）に使う道具。座って糸繰りを行うことから座繰と呼ばれる。大小の歯車を組み合わせて、ハンドルを回すと、糸巻が回転すると同時に手前の腕木が左右に振られ、糸を均等に巻き取ることができる。製作所によって歯車の仕組みに違いがある。（個人蔵）

●糸車（いとぐるま）
糸に撚りをかけたり、糸を機織り機で使う管に巻き取るための道具。大きな車が印象的な道具である。

●杼（ひ）
機織り機で緯糸（よこいと）を通す道具。中央の空間に糸をセットする。流線形で先端には象牙が嵌められ、下面には走りを良くするための車輪を埋め込むなど、緯糸を通しやすい工夫がされている。　（個人蔵）

●足袋（たび）の足型（あしがた）
足袋を作る際に使用する足型。吹上にはかつて足袋工場があり、その生産量は行田を凌ぐほどであったという。

●横槌（よこづち）
藁敲（わらたた）きとも呼ばれる。丸木から柄を削り出した形が一般的。藁を編んだりして利用する時に藁を叩いて潰し編んだ藁同士の設置面積を大きくして強度を高めるための道具である。

●綿繰り（わたくり）
実繰（さねくり）とも呼ばれる。収穫した綿花から種を取り除くための道具。丸棒の間に種の付いた綿花を通すと、種だけが残る仕組み。

●鞴（ふいご）
鍛冶炉の火力を上げるための送風装置。取っ手を引いて押し込むと手前の孔（鍛冶炉に接続するための孔）から空気が送り出される仕組み。

Ⅲ．住まう　～生活道具～

●火熨斗

昔のアイロン。日本では５世紀代の古墳から副葬品として出土した事例がある。円形の金属製容器に着火した木炭を入れて容器全体を熱し、容器底面を布に当てて使用する。　（個人蔵）

●炭火アイロン

火熨斗に代わって登場した。中に着火した木炭を入れて使用する。形は現在のアイロンに近い。電気アイロンの登場と共に使われなくなった。本資料は高い煙突が特徴的である。

●小田原提灯

灯火具である提灯の一種。火袋の中に蝋燭を立てて使用する。小田原提灯は、携帯できるように、火袋が上下の金属部品と同じ幅の円筒状を呈しており、折り畳むと金属部品の中に火袋が収まる仕組み。小田原で考案されたことが名前の由来である。

●灯火管制用電球

大戦中に使われていた電球。光が広がらないように先端部分を残して色が塗られている。これを戦争に備える心構えなどが書かれた傘に嵌めて使用した。大戦中の暮らしを伝える一品である。　（個人蔵）

●アイスクリーム製造機

金属製の容器に材料を入れて木製桶内に納め、周囲に氷と塩を入れて材料を冷やしながら攪拌してアイスクリームを作る。形状等からアメリカ製と思われる。

●洗濯板

衣類を洗うのに使う板。洗いやすくするための溝がある。明治時代に洋式化と共に導入・普及し、洗濯機の登場と共に生産が減少した。

●貧乏徳利

酒屋が小売用容器として貸し出した陶器製の徳利。貸徳利、通徳利とも呼ばれる。多くの場合、徳利に酒屋の場所（地名）や酒屋の名前が入る。関東大震災（大正12年）の後、ガラス製に代わっていったとされる。写真は、左から前砂にかつてあった保曽屋、大宮の酒屋（店名不明）、日野屋（久喜市か）である。

●猫炬燵

行火とも呼ばれる。手足を温めるための移動式の炬燵。様々な材質・形のものがあるが、本資料は木製の枠の中に金属製の火鉢が入る。木枠が転がっても火鉢が水平を保てるように工夫されている。

コラム 1

形の意味を探る　～民具を科学する～

民具にはその当時の暮らしや作業をより快適に行えるよう、様々な工夫がされている。今よりも加工具、材料、システムなどが制限される中での工夫には、感動を覚えるものも少なくない。しかし、作られて長い時間が経過し、古い道具ほど聞き取りができない状況になっており、先人が知恵を絞って考えられた工夫の数々が誰も引き継ぐことも無く途絶えようとしているのである。私達は、主に木製の民具を対象として、樹種同定（木材組織のプレパラートを作製して顕微鏡観察で樹種を確かめる科学的な手法）と工学的な検討から、形や構造に隠された工夫を明らかにして、それを今に生かすための研究を行っている。今回は、その中から、特集記事でも紹介した高北式の犂（からすき）の形に秘められた工夫について紹介したい。

高北式の犂（からすき）は、日本各地に多くの資料が残されており、生産量が多かったことが伺える。高北式の犂（からすき）を構成する木製部材は、樹種同定の結果で大部分が針葉樹のスギやヒノキを使っていることが明らかとなった。犂（からすき）のような農耕具がスギやヒノキで作られている結果は、木製品を研究している立場からみると意外な結果である。というのは、木材は一般的に重いものほど強度が高い。広葉樹の方が針葉樹よりも重く強度が高い種類が多く、針葉樹のスギやヒノキは木材の中では軽く強度が低い部類に入る。農耕具のような強度が必要な道具にはスギやヒノキは適材とは思えないのである。

高北式の機能性を考えるために、全方位の写真を撮影して3D データ化して、コンピューター上で牛馬に引かれた時と同じように負荷を加えてみたのが図 2 である。青い部分は負荷が小さく、赤い部分ほど負荷が大きいことを示している。これを見ると、牛馬に引かれた際に地面に擦ることになる底面に赤い部分があるが、その他に大きな負荷は見られず、極めて機能的なデザインといえる。とくに「く」の字形に作られている部分（図 2 の矢印 1）が大きな役割を果たしていることが推定された。また、犂轅と犂柄（図 2 の矢印 2）が力学的には繋がっていないとみなせる点も特徴的で、かなり思い切った設計になっている。

以上の結果から、高北式の犂（からすき）は、大量に生産するために、植林等で入手が容易なスギやヒノキを使用することを前提としており、スギやヒノキでも耐えられるように部材を太くしたり、力をうまく分散させる形状に設計されていることが分かった。今のようにコンピューター上で計算しながら設計できる訳ではなく、何度も試行錯誤を繰り返して作られたのであろう。まさに先人の知恵と努力が結実したデザインといえる。

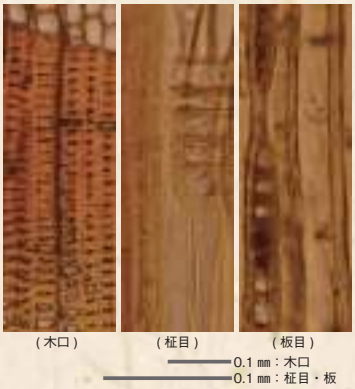


図 1　スギの木材組織

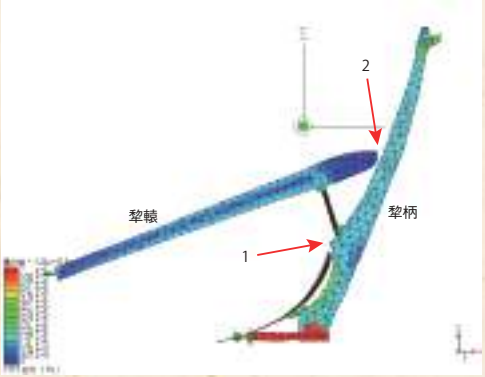


図 2　高北式犂の工学的な検討結果

高橋　敦
（株式会社古生態研究所）
久保光徳
（千葉大学デザイン・リサーチ・インスティテュート）
桃井宏和
（公益財団法人元興寺文化財研究所）

学校法人 鴻巣佐藤学園
鴻巣幼稚園
園長　佐藤 芳隆
〒365-0038 鴻巣市本町 6 丁目 3 番 4 号（東小学校前）
TEL (048) 541-0575　FAX (048) 543-6222
HP　http://www.kounosu-kg.com/
鴻巣幼稚園
幼稚園専用駐車場完備